

2019年7月19日（金）

# 未来への扉

高等特別支援学校支援部 123号



## ♪さあ夏休み♪

もう卒業したAさんが1年生の夏休み、部活の合宿の時のお話です。明日のお迎えの時間をお母さんに言い忘れたと電話したいと申し出てきました。しかし、そこは圏外。ケータイ（今ならスマホ？）はつながりません。夜、宿泊棟から公衆電話のある本館までAさんと一緒に出掛けました。

ここから私は、**ケータイがいかに便利で、慣れない公衆電話を使うことが今の生徒達にはいかに難しいものか**、思い知ることとなりました。

### 📞📞📞📞📞 公衆電話を掛ける手順 📞📞📞📞📞

#### ①公衆電話を見つける

大人なら“事務室の近く”や“駅”にある見当はつきませんが、生徒達は普段気にしていないので見つけられません。緑色であるという認識のない生徒もいます。

#### ②必要なら両替を申し出る

“施設の人”や“お店”にはお願いしやすいですね。

#### ③電話番号を覚えておく、又はメモして持つておく

#### ④受話器をあげる→お金を入れる→ダイヤルボタンを押すを順番通りする

#### ⑤ダイヤルボタンは適切な力加減と適切な早さで押す メモを見ながらゆっくり押すと、途中で切れます。

#### ⑥自分から名乗って、積極的に話す

### 📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞📞

①～⑥の手間を、ケータイなら**短縮ダイヤルボタン**ひとつ押すだけですませてしまうことができます。しかし、公衆電話はそうはいきません。

何回かボタンを押し違えながらもがんばったAさん、やっと電話がつながりました。しかし、電話口にお母さんが出て、だまったまま何も話しません。

「Aです。って言うのよ。」と横から名乗るように言っても、Aさんは不思議そうな顔をするばかり。とうとうお母さんに通話を切られてしまいました。

あ、そうか。と私は思い当たりました。  
ケータイで発信すると、誰からの電話が表示されるので、電話口で名乗る必要がなかった訳です。  
今まではお母さん側から「Aちゃん？どうしたの？」等言ってもらっていたのでしょう。

Aさんに公衆電話では名乗らなければいけない理由を説明して、名乗る練習もして、再度チャレンジ。

しかし、お母さんの声を聞いてホッとしたのか、電話口では「えへへ。」と言うのが精一杯、また通話を切られてしまいました。

そこからはAさんも「これはマズイ。」と思って電話するのですが、完全に不審な電話だと思ったお母さんは二度と電話に出てくれませんでした。

ケータイはなくすことも、忘れることも、充電が切れることもあります。いざという時、公衆電話を使わなければならない時が来るでしょう。ケータイを使い慣れた生徒ほど公衆電話との違いに戸惑うようです。特に受身のコミュニケーションが多い生徒は⑥の「名乗る」のハードルが高い。

Aさんだけでなく、今、学校を卒業したての新社会人達が会社に掛かってきた電話の対応を避けて困るという話を聞きます。名前も分からない状態から、ゼロから相手とコミュニケーションを取るのには、練習が必要なのでしょう。

その時はAさんも私も困ったのですが、いつものんびり屋のAさんが一生懸命電話を掛けている姿を見ると、この失敗も必要な体験だったと感ずることができました。

「お母さん、知らない人から何回もしつこく電話があったと思って怖い思いしているかもしれないね。明日先生からも事情を説明するから、Aさんからも話をしてね。」

次の日、お母さんは無事に迎えにきてくれました。しおりを見て時間を確認していたそうです。

1学期の“未来への扉”は今回で終わりです。  
今学期保護者の皆様にお伝えしたかったことは、

**基礎学力をこれ以上つけることを重視する時期は終わり、**  
社会に出る一步手前のこの時期、大切にしたい目標は

「生活や人間関係の中で、適切な言動をとる実践的な力」  
である **ソーシャルスキル**

と

「自立をかなえる力」である **ライフスキル**

を身につけることです

中学まで学力向上を目標に努力してきた生徒も多い事と思います。でも今後は、学力で勝負するわけではないことを、まずは保護者の皆様に知っていただき、生徒達にも**がんばりどころ**を教えていってあげてほしいと思います。特に“変更”が苦手な生徒さんには。

今回の公衆電話のお話はソーシャルスキル、ライフスキル両方のスキルに通じますね。実際に事務室前の公衆電話で、お金もメモも持ちながら立ちつくしている生徒に出会うことが何度かあります。

一度体験しても忘れてしまう生徒も多いと思いますが、自分でできた成功体験の記憶は、行動の後押しをしてくれるでしょう。



さあ！夏休みが始まります！

夏休みの課題は、教科は違えど、分からない部分は周りに少しヒントをもらいながらも“自分でやり遂げる”集中力と持続力が必要なものとなっています。

そして40日もの長い夏休みが与えられる「学校生活」も本校での夏休みが最後です。社会に出れば、これだけまとまった休みは取れません。“公衆電話”や“お昼ご飯作り”などの体験を増やしていくと共に、普段できない「何か」にチャレンジして一回り成長してくれる事を願って、生徒達を応援したいものです。